

管理不備を修正し、「温かい自立」をみずえる

島本 政志

1. 冷たい「自立」

「おれの掃除せなあかんところは終わったんやらから、後はしらんやんけ。」

これは私がかつて担任した子の発言である。

掃除一人一役のシステムを採用していた。教師が「できている・できていない」をチェックして、自分のところは責任をもつて掃除に取り組ませる、できていなかったらやり直しをさせるといふ手法である。

もちろん、この発言をした子は彼特有の課題（家庭環境や担任との不和など）があったのであるが、私にとつてはこの発言は忘れられないものになった。

個に責任をもって仕事をさせる、つま

り自己責任とともに自立に向かわせようと思つてやったこと、一方で非常に冷たい学級をつくる要素にもなりかねないということに気づいたのである。

自立した子どもは最終的には教師が不要になった状態であり、それは本来の意味での小学校の卒業ということになる。そのためにもこの6月時点での学級における「ほつれ」に手を打つ必要がある。

しかし、ここで考えなければならぬのは「自立」のイメージである。

また学級組織としての自立と一人一人の子どもにとつての「自立」という二つの視点から見ても必要もあるだろう。それはなぜか。

前者は4月、5月での学級組織での穴というか欠陥と言うか、子どもの努力というよりもむしろ教師の管理の不備を整備、修正していく部分である。

淡々と日常生活を送ろうとしているのに、どこかごたごたしている部分がないかチェックする。

後者は私個人の考えになつてしまふかもしれないが、他者を不要とする自立などは不可能であるし、また目指す必要がないと思う。自分の苦手なところは他者に助けてもらうことのできる適切な関係性をつくることができ、また自分ができることは他者を助ける優しさをもつ。そんな関係性ができれば十分ではないだろうか。いびつな形での「自立」促しは自己責任型の冷たさを避けられない。

1. 提出物

提出物を出す子がほとんどだが、出さない子もいる。名簿で確認されてから出すような子が複数いる状態。毎日の出す必要がある提出物について再度確認をする。

もし忘れていてもきちんと、「忘れました」と言い、朝のうちにやり始めようと

している状態を目指す。

宿題をきちんとしている子をほめながらも、できていない子には個別の声掛けをしていく。励ましていく。

2. おぼやかいけうま

机に手をかけたり、ゆっくり立ったりする子もいる。

そこで「起立」「おそい。やり直し」などと指示をすることで気が引き締めなおさせる。

次に挨拶である。挨拶の声を全員がきちんと出しきっている声ではない。決して、小さくはない。そのため教師も「まあ、いいだろう」と考えてしまう。

「隣の子におはよう、と言つてごらん」と指示し声を出すのを慣れさせてから、全体の挨拶に入る。

学校の目標に「あいさつ」がある。まず教師からの明るい挨拶をすることで挨拶の良さを感じさせたい。時間はかかるが粘り強くやっていく。

3. 給食

放送委員会、給食委員会で抜ける子がいる。しかし、抜けるのに他の子に依頼せずに出てしまうので、結局その穴を教師か別の子が急に埋めることになる。給食当番の先頭の子に「ペアはいますか」と確認の声掛けをしてから出発させる。

4. 清掃

6年生ということで複数の教室をチェックしたり手助けのために移動したりしていた。そのため、一人一人の頑張っているところを見落としていた。

手洗い場を一人のおとなしい女の子に任せているが、その子が本当に黙々と取りくんでいることに驚いた。

やんちゃな男子が自分の担当場所を終えた後、頼んでもいないのに、「先生、ここやってもいい?」と聞いてきた。

「できている。できていない。」を言う

のは簡単だが、その子の掃除への取り組み方をしっかりと見るにはその場で一緒に掃除を試みる必要がある。また、そのことは一人一人の子どもも理解を大いに役立てるものになると思う。自分の担当場所が終わったら他の人を助ける。お互い協力し合う、そんな関係性の良さを学級に広めていきたい。

5. やらされる「自立」ではなく

まず教師は自立に向かう目的をきちんと趣意説明することが必要である。

子どもたちが納得し、理解できるよう「自立」やその道筋でなければ、結局、「やらされている自立」になってしまいう可能性が高い。

最初に書いたように、自立が「自己責任のつめたい学級づくり」に向かわないように留意したい。バランスが難しいが、挑戦していきたいと思う。